

フランス音楽史における 「近代フランス音楽」の射程

成田麗奈

Reina Naruta

はじめに

本稿は、フランスの音楽史記述における「近代フランス音楽」の時代区分の射程を明らかにすることを目的とする。調査対象とするのはフランス語で書かれたフランス音楽史(通史)および近代フランス音楽史¹である。西洋音楽史(通史)および近現代音楽史については、他国を含めた時代区分の検討と妥当性の考察が必要であるため稿をあらためて論じるが、主要な文献については適宜言及する。

第1章で確認するように、「近代フランス音楽」の射程はさまざまに定義されているが、本稿では仮説として1870-1945年を「近代フランス音楽」としたうえで、音楽史記述における時期区分を検証する。

1. 近代の定義

はじめに、ごく一般的な定義と主要音楽事典における定義、近代フランス音楽研究における時期区分について傾向を整理する。

1. 1. 一般的な定義

周知の通り、日本語で「近代」にあたるフランス語 *moderne* の語義には、大きく三つに大別される。一つ目は「現代の」という意味である。音楽史書における類似の表現としては「今日 *d'aujourd'hui*」「同時代・現代 *contemporaine*」「私たちの時代 *nos jours*」が挙げられるが、これらはいずれも「現代」という意味で用いられている。また、必ずしも「近代 *moderne*」と「現代 *contemporaine*」と区別されているわけではないことには十分留意せねばならない。二つ目には「最新式の」「進歩的な」という意味が挙げられ、音楽史書においては「新しい *nouvelle*」「前衛 *avant-garde*」「進歩 *évolution*」「革新 *révolution*」という形容

¹ 一次資料は「現代音楽史」として出版されているものが多いが、本稿では近代を扱っている文献に関しては近代音楽史として分類する。

が用いられることが多い。この意味においては、モダニズムおよび前衛主義の美的価値観と結びつけられることもある。三つ目は「近代の」、「近世の」という意味であり、政治史においては近世をコンスタンティノープル陥落（1453）からフランス革命（1789）までと区分する立場、フランス革命（1789）以降とする立場、19世紀以降とする立場、19世紀後半以降とする立場、1918年以降とする立場など諸説ある。

1. 2. 主要な音楽事典における定義

主要な音楽事典における記述としては、『ニューグローヴ世界音楽大事典』日本語訳版「フランス」の項目においては、「I. 芸術音楽」の項目のうち近代は「7. 普仏戦争後」「8. ヴァーグナーの影響」「9. 第一次世界大戦から第二次世界大戦まで」「10. 1940年以降」という区分になっており、政治史における三つの戦争が時期区分と機能していること、ヴァーグナーの存在がメルクマルとなっていることがわかる（Cooper 1994: 274-277）²。いっぽう、同「パリ」の項目においては、1870年以降が一括りになっており、その中で1870-1914年、1914-1945年、第二次世界大戦以降が区分され、ここでも三つの戦争が区分として機能を果たしている（[Pasler] 1994: 422-424）。

ニューグローヴ・オンライン版「フランス」の項目では、「I. 芸術音楽」の時期区分が根本的に変わり、中世以外は世紀ごとの区分となっている。19世紀についてはオペラ、コンサート・ライブ、音楽教育、出版、楽器製作という項目に分かれており、時代の細分化は行われていない。20世紀については、1945年で区切られている。すなわち、近代に相当する時期は1901-1945年として区分されていることになる（Lesure 2017）。同「パリ」の項目においては、1870年以降が一括りになっていることに変わりはないが、その中で1870-1918年、1918-1944年4月、1945年以降と区分されており、引き続き三つの戦争が区分として機能を果たしているものの、区分する年に僅かな変更が見られる（Pasler 2017）。

『MGG』「フランス」の項目においては、1870年から1944年までが一時代として区分されており、そのなかでも1914年まで、1914-1944年に分けられている（Faure 1994: 770-776）。いっぽう、「パリ」の項目に関しては世紀ごとの区分となっている（Laederich 1994: 1369-1375）。

² 7では国民音楽協会・独立音楽協会ほか演奏団体の活動、メロディの発展、交響曲とオペラにおける変化、8はパリのヴァーグナー熱、脱ヴァーグナーとしてのロシア音楽、ドビュッシー《ペレアスとメリザンド》、ロシア・バレエ団バレエ音楽、9では簡潔な音楽、日常の音楽、ストラヴィンスキーの新古典主義、10は楽派の系譜、新ウィーン楽派受容が音楽史上の重要なトピックとして言及されている。

『音楽大事典』(平凡社)「フランス」の項目においては、「芸術音楽」の項目に「近代フランス音楽」という小見出しがあり³、グノー以降の世代の音楽が黎明期・フォーレやドビュッシー以降がフランスの第四黄金時代⁴をかたちづくる最盛期に分けられ、第一次世界大戦後は別の時期として区分されている(平島 1982: 2154-2161)。

以上のことから、事典項目においては概ね三つの戦争が区分として用いられていること、そのなかでも 1870 年と 1945 年が大きな節目とみなされていることが見て取れる。その間の小区分として用いられる第一次世界大戦に関しては、1914 年と 1918 年のいずれを採るか、見解が分かれている。

1. 3. 先行研究における時代区分

フランス音楽研究においては、世紀ごとの区分をするものと、三つの戦争のうちいずれかを区分するものとに大別される。世紀で区分しているものとしては、19 世紀音楽を扱っている Gut and Pistone (1977) および Pistone (1979) などのほか、20 世紀前半を扱った Caron, de Medicis and Duchesneau (2006) が挙げられる。三つの戦争で区分しているものとしては、普仏戦争から第二次世界大戦まで(第三共和政)を扱う Duchesneau (1997)、Kelly (2008)、普仏戦争から第一次世界大戦までを扱う Gut and Pistone (1978)、第一次世界大戦から第二次世界大戦までを扱った Kelly (2013) などがある。同一著者でも異なる区分を用いていることから、これらは大きな時代区分というよりは、テーマに応じて時期区分をしていると判断すべきだが、区分の傾向としては参照に値する。

2. 時代区分の傾向

フランスにおいて「フランス音楽史」が通史として書かれることは少なく、西洋音楽通史が 1870 年以降数百を超えるのに対し、フランス音楽史はわずか 10 程度しか出版されていない⁵。近代フランス音楽史は現在に至るまで定期的に刊行されているが、その殆どは、20 世紀前半に「現代音楽」として出版されたものである。

³ 本項目は「近代フランス音楽」という呼称が用いられている数少ない例でもある。

⁴ 後述のデュフルク Dufourcq (1949) をふまえての記述だと考えられる。

⁵ フランスにおける音楽史書の刊行状況については拙稿(2015)を参照されたい。友利(2013)が指摘するように、フランスの視点から普遍的な「西洋音楽史」を書くこと自体がフランス音楽史であるという認識が根底にある(友利 2013: 108)。そのため、「音楽史」「西洋音楽史」「西欧音楽史」が音楽史書の主流であった。「フランス音楽史」が書かれるのは、主として「自己のアイデンティティの問題が突きつけられる特殊な状況下」(友利 2013: 108)であり、具体的には戦中・戦後にフランス音楽のアイデンティティを確認するために書かれることが多い。その他の要因としては、事典・辞典の出版が好まれていた、時代別・ジャンル別の研究書の蓄積が優先されたとも考えられる。

フランスの音楽史書全般（本稿で対象としない西洋音楽通史や近現代音楽史等を含む）に関して、「近代フランス音楽」を含む時期区分としては、以下の四種類に大別される。

- A) 世紀ごとの区分
- B) 三つの戦争のいずれか・もしくは全てによる区分
- C) 刊行年から遡る 25 年・50 年・100 年の区分
- D) 時代の転換点を象徴する作曲家による区分

これらのうち、多くは A と B の二種類に大別される。そのうち、A については 20 世紀でもどこで細分するかによって分かれるが、戦争によって区分する場合と、四半世紀・半世紀によって区分する場合とがある。B に関しても、戦争を節目としてとらえるか、連続性のあるものとしてとらえるのかで分かれている。フランスの音楽史書に関しては、ロマン主義の終焉といわれる 1890 年から 20 世紀半ば頃までを指す、いわゆる音楽史の時代様式に基づく区分はみられない。

これらの四種の区分は、それぞれに折衷して用いられたり、ジャンル別・国別に細分されたりする場合もある。以下、この分類にしたがいつつ、フランスの音楽史書において「近代フランス音楽」がどのように区分されているのかを概観する。原則としてフランス音楽史の通史と近代フランス音楽史を対象に説明するが、そのほかの音楽史書についても適宜言及する。

A. 世紀ごとの区分

フランス音楽史および近代フランス音楽史に関しては、この種の区分はほとんど見られない。実際、書名や章のタイトルとして世紀の区分を用いていたとしても、実際にはことなる区分が用いられている。たとえば、ラヴォワ Lavoix (1891) の初版では 19 世紀までの音楽しか扱われていないが、増補改訂版（出版年不明）に際して、ロビノー Robineau が 20 世紀初頭の音楽に関する章を加筆している（1909 年 12 月の署名）。ここでは事実上 1870 年以降のフランス音楽のあらたな試みに関する概観が記述されている。また、ブリュノー Bruneau (1901)⁶ は書名としては 8 世紀から 20 世紀までという区分を用いているが、本文では世紀ごとの時代区分は行っていない。近代に相当する作曲家については、

⁶ 本書の概要については塚田 (2016) に詳しい。本書が書かれる契機となった 1900 年万国博覧会については井上 (2009) に詳しい。

フォーレやドビュッシーらについて論じてはいるものの、万博におけるフランス音楽の演奏会に際しての報告書という性質もあり、万博関係者についても言及されている点で特殊だ。

概して、フランスの音楽史書においては、中世やルネサンス、ロマン主義時代に関してはいわゆる音楽様式の時代区分に従うことが多いが、いわゆるバロック時代と近現代に関しては、世紀で区分することが多い。とりわけ、通史においては、この傾向が顕著である。たとえば、英米語圏・ドイツ語圏の音楽史記述と極めて近い記述傾向を持つパティエ Patier(1993)は、全5章のうち、20世紀を扱う第5章を「現代の世界 *Le monde contemporain*」としている⁷。原則として世紀ごとの区分を用いながらも、19世紀末、世紀転換期、20世紀前半・後半といった区分をしている例としては、コンバリュウ、デュメニル(1955-60)、ロラン＝マニュエル(1960-63)、マサン Massin(1983)などが挙げられる。近現代音楽史に関しても、一世紀もしくは半世紀を区切りとする例がみられる。たとえばランドヴスキ Landowski(1941)においては近代を1900年以降の音楽を扱っている。

B. 三つの戦争のいずれか・もしくは全てによる区分

近現代のフランス史において重要な転換点となっているのは、三つの戦争、すなわち1870-71年の普仏戦争、1914-1918年の第一次世界大戦、1942-1945年の第二次世界大戦である。この三つの戦争は、通史においても細分化の際に用いられてはいるが、とりわけフランス音楽史および近代フランス音楽史においては、重要な時代区分として用いられることが多い。

第一次世界大戦中に刊行されたジャン＝オブリ Jean-Aubry(1916)では、タイトルや目次では明確な時代区分はなされていないものの、フォーレによる序文では1870年の普仏戦争について言及されており、ジャン＝オブリによる第1章においても、サン＝サーンス以

⁷ ただし、1900年から45年までを扱った「近代音楽 *La musique moderne de 1900 à 1945*」と1945年以降を扱った「1945年から今日までの新しい傾向 *Perspectives nouvelles de 1945 à nos jours*」と区分されている。このうち「近代音楽」で中心的に扱われているのはドイツとフランスで、ドイツ音楽ではポスト・ワーグナーといわゆる新ウィーン楽派がカノンとして扱われている。フランス音楽に関しては、大きな時期区分としては先述の通りだが、1870年頃にフランス音楽の刷新がはかられ、1890年頃に新しい世代が活躍し始めたこと記述されている(Patier 1993: 521)。そして、新しい傾向を「音楽の印象主義 *impressionnisme musical*」として、ドビュッシー、ラヴェル、デュカ、ルーセル、フロラン・シュミットを扱っている(Patier 1993: 521-528)。次いで「新古典主義と両大戦間のフランス音楽 *Le néo-classicisme et la musique française de l'entre-deux-guerre*」においては、サティと六人組を扱っている(Patier 1993: 545-550)。すなわち、近代の区分の中でも、三つの大戦が細分する際の区分として機能していることがわかる。

降のフランス音楽とドイツ音楽との比較論が展開されている。そして最終章においては、ドイツ音楽に対するフランス音楽の勝利が宣言され、ドイツ音楽の栄光は過去のものであり、偉大なるフランスの未来への期待が述べられている (Jean-Aubry 1916: 2)。

ティエルソ Tiersot (1918) は、1870年から1917年までのフランス音楽の約半世紀を振り返り、序論において、この時期を「現代音楽 *musique moderne*」として、フランス音楽がかつてないほど活発で洗練された発展を見せた時期であると主張している。本書の中心となるのは、1870年以降のオペラや器楽を先導した作曲家や楽派である。そしてドビュッシー以降の世代は「1900年以降」の章で若い世代として扱われており、「フランス楽派の優位性 *suprématie de l'école française*」が主張されている (Tiersot 1918: 2)。

フランソワ＝サペー Francois-Sappey (2013) においては、1870年以降のフランス音楽に関する研究や古典回帰運動の動向をふまえつつ、1870年、1918年、1945年という三つの「戦後」を節目として、時代の変化に呼応した「フランス音楽」あり方の変化をコンパクトにまとめている。フランス音楽を西洋音楽史の中でどう (優位に) 位置づけるか、という従来のフランス音楽史とは異なり、本書の根底には、「フランス音楽」とは何か「フランスの精神」とは何かという問いがあり、これらの問いに、作曲家たちがどう向き合い創作してきたのかをとらえようとしている。

C. 刊行年から遡る 25年・50年・100年の区分

1900年以降、フランス音楽の過去を振り返る音楽史書が定期的に刊行されている⁸。AおよびBの区分とはある種一線を画す形で、過去25年・50年・100年という区切りで、刊行年から遡る一定期間を概観するという趣旨である。ただし、実際に扱われている内容には、別の時代区分が垣間見える。

ソレニエール Solenière『フランス音楽の100年 (1800-1900)』(1901) においては、過去100年間のフランス音楽の状況についてオペラを中心に概観し、ワーグナーの革命以降、フランスのオペラ作曲家が独自の音楽表現をするためにどのような努力を重ねてきたのかが述べられている。

ロオゾィンスキ Rohozinski『フランス音楽の50年』(1925-28) はタイトルとしては刊行年から過去50年を振り返っているが、各章を担当している執筆者は、実際には1870年以

⁸ たとえば Baillar (1916) のように、音楽史以外でも半世紀を振り返る出版物はみられる。友利 (2014) によれば、経済・社会・文化一般に見られた認識であり、普仏戦争以降の半世紀を振り返り、何かを達成したことを明示し自己確認しようとしていたと考えられる。

降の各ジャンルにおけるフランス音楽の動向を論じている。

このほかにも、ジェルマン＝ダヴィッド Germain-David (2004) が 1950 年から 2000 年までのフランス音楽について概観している例もある。

これらのうち、第二次世界大戦前の二例に関しては、過去 25 年・50 年を振り返ることが、近代フランス音楽の成し遂げたことを再確認するという意味でも重要な意味を持っていたと考えられる。

D. 時代の転換点を象徴する作曲家による区分

音楽史において、バッハの死やベートーヴェンの死がひとつの時代の転換点としてとらえられてきたように、フランスの音楽史書においても、作曲家をひとつのメルクマルとしてとらえる例が数多くみられる。クーブラン、ラモーをはじめ、いわゆる外国人作曲家としてフランス音楽に多大な貢献をしたリュリヤグルックもまた、フランス音楽における重要なメルクマルとみなされている。「近代フランス音楽」にかかわる「フランスの作曲家」としては、ベルリオーズ（没年が 1969 年）、ドビュッシー（没年が 1918 年）の死がふたつの戦争とほぼ重なることもあり、時代の節目の象徴と目されるが、ベルリオーズというカノンに匹敵する重要な時代の転換点が、「ドイツの作曲家」であるワーグナーに見出されることも多い。また、時代の転換に貢献した作曲家としては、フランクやサン＝サーンス、フォーレ、ドビュッシーらの名前が挙がる。以下、具体例を見ていこう。

コカール Coquard 『ラモー以降のフランス音楽』（1891）においては、各章に主要な作曲家名を配して構成されているが、第 7 章「現代 époque contemporaine」に関してはベルリオーズ以降のフランス音楽の楽派の系譜を記述している。そして続く第 8 章ではワーグナーに単独の章を充てており、フランスにおけるワーグナーの影響力を重視していることがわかる。

リスボン国立音楽院とコアンブル音楽アカデミーにおける講義録として刊行されたヴェイル Weil 『クーブランからラヴェルまで：フランス音楽概観』（1935）では、クーブラン以降のフランス古典音楽から、ワーグナーの影響を経てフランス楽派の隆盛を概観し、近年の大作曲家としてドビュッシー、フォーレ、ラヴェル、ルーセルの名を挙げている。本文中のこの言及は重要な順であると推察されるが、この中でもっとも若いラヴェルが、本書の締めくくりの名前として本書タイトルにも用いられていると考えられる。

レクチャー・コンサートの講義録として出版されたベルナル Bernard (1930) におい

ては、19世紀までのフランス音楽の状況が第1回で概観されたのち、フランクの登場によって大きな変化が生まれ、ドイツ音楽の要素を用いたフランス音楽の確立ののちに、類稀なる天才としてのドビュッシーが登場したという位置づけがなされている。

両大戦間のフランス音楽史として計画され、それ以前の音楽も含めた3巻からなるランドルミー Landormy『フランス音楽』(1943-44)は、時系列に挙げると『ラ・マルセイエーズからベルリオーズの死まで』『フランクからドビュッシーまで』『ドビュッシー以降』というタイトルが用いられており、フランス革命(ラ・マルセイエーズ)を除いては、時代の転換期として作曲家名を用いており、内容も作曲家の系譜を記述していくものとなっている。

ロスタン Rostand (1952)においては三大大家すなわちフォーレ、ドビュッシー、ラヴェル以降の音楽を「現代音楽」と位置づけており、1885年以降に生まれた世代の作曲家として、六人組、アルクイユ楽派、「若きフランス」をはじめとして、数多くの作曲家が紹介されている。フォーレ、ドビュッシー、ラヴェルを三人で一括りに扱う例は音楽史書としてはそう多くないのだが、彼らがあるひとつの時代の区切り目として位置づけられ、それ以降の音楽が記述されるという形式がとられている。

E. その他

今日もっとも参照されることの多いデュフルク Dufourcq『フランス音楽』(1949)においては、特殊な区分が行われている。彼はフランス音楽における黄金期のうち、近代に相当する時期を「第四黄金期」(1860-1960)ととらえており、1850-60年代を前触れ、復興、1870-80年代をフランス楽派の復権、1880-1900年代をフランス楽派の飛躍、1900-1910年代を急成長、1910-40年代をフランス音楽の支配と位置づけている。概ね1870-1945年を含む100年間を一時代ととらえているため、BおよびCの折衷とも考えることができよう。

3. 近代フランス音楽の時代区分をめぐる論点

前章で見てきたように、フランス音楽史および近現代フランス音楽史においては、BおよびDの時代区分が主流を占めていることがわかる。以下、「近代フランス音楽」の時代区分の中でも重要な転換点とされる節目について、その区分がどのような音楽史観と結びついているのかを概観する。

3. 1. 「近代フランス音楽」の始まりとしての1870年

一般的に、普仏戦争の敗戦を機に、「フランス音楽」の復興が称揚され、音楽協会や演奏団体の設立、音楽学の確立、あらたなる創作の模索が盛んになったことは広く知られている。それゆえ、1870年を「近代フランス音楽」の始まりととらえることは、一般的な共通了解と言って差し支えあるまい。実際、この年を書名に含めた近代フランス音楽史も数多く出版されている。また、フランス音楽の研究書に関しても、この年を区切りとする例が多い。

3. 2. ターニングポイントとしての第一次世界大戦

1918年に第一次世界大戦における勝利を契機に、フランス音楽の勝利への確信が強固たるものとなり、「祝祭の時代」である1920年代の熱狂に押される形で、この節目を機に、真に「フランスのフランス音楽」が発展していくという楽観的な未来像が描かれた。ランドルミーは『音楽史』（1910）の改訂版（1923）に際して、フランス音楽が世界最高峰のものである事を誇らしく主張している（Landormy 1923: 454）。また、ウーレ Woollett 著『音楽史』の最終巻（1924）にも、フランスが世界の中心であり、音楽の覇権を取り戻したという記述が見られる（Woollett 1924: 450）。

だが、三つの戦争のうち、第一次世界大戦を大きな節目ととらえるかどうかは、議論の余地がある。実際のところ、フランス音楽の時代の節目としては、1870年ほどの、そしてそれ以前の節目ほどの大きな転換としてはとらえられていないというのが実情である。実際、ランドルミー（1923）をはじめとする、第一次世界大戦後のフランス音楽を新たな幕開けとして、それ以前との根本的な差異を強調するのは、あくまでもフランス音楽が世界一の存在であることを主張する文脈においてのみである。むしろ、音楽史書においては、1870年以降、フランス音楽が過去の伝統を再興し、いかに途切れることなく新たな系譜をつないでいるのかが主張されることが多く、それゆえに、大作曲家の存在のみならず、さまざまな楽派やアンデパンダンの存在を幅広く取り上げ、多彩な才能が各世代に存在することが確認されていくのである。

3. 3. 「近代」の「終わり」

先述の通り、フランス音楽史において1870年が大きな転換点であることは揺るぎないことであることが確認されたが、それでは1870年から始まった「近代」もしくは「現代」は

どこで終わっていると判断すればよいのだろうか。これに関しては、フランス音楽優位の音楽史の継続性という観点から、未来まで永続していくという認識はありうる。それゆえ、近代の終わりを明確に区分する例はそう多くないが、いくつか見られる例としては、現代音楽について 1945 年⁹ もしくは 1950 年¹⁰ 以降を扱う例がある。これに関しては一般的な音楽史における「現代」の区分とも概ね一致する¹¹。

3. 4. 時代の転換点としての作曲家

前章 D において、時代の転換点として作曲家の名前が挙げられる例が多いことを確認したが、そのなかでも最も重視されてきたのは、ワーグナーとドビュッシーだ。フランスにおいては、脱ワーグナーは脱ロマン主義と軌を一にするものであり、脱ドイツ音楽をも意味していた。それゆえにこそ、ワーグナーは「ドイツの作曲家」でありながら、フランス音楽の時代の転換点として重要なメルクマルであったと考えられる。

いっぽう、ドビュッシーがメルクマルとして比類なきほど重視される¹² に至ったのは、ドイツ音楽の影響を受けていると評価されたフランクやサン＝サーンスらの後に、フランス音楽の伝統を取り戻した作曲家として重視されたためである。そして脱ワーグナーを象徴する《ペレアスとメリザンド》を作曲した功績が称えられ、フランス音楽の再飛躍のひとつの頂点として位置づけられている。そして、ドビュッシー没後の、第一次世界大戦以降に活躍する世代は、ドビュッシーの成し遂げた革新を、別のあらたな手段で継承する存在として記述されていくことになる。

3. 5. 近代フランス音楽の「黄金時代」と「フランス音楽の優位 *suprématie*」

1870 年以降のフランス音楽を、三つの戦争および大作曲家で区切る背景には、この時代「近代フランス音楽」を黄金時代の再来と目す音楽史観がみられ、フランス音楽が覇権を取り戻したことを確信する音楽史記述とわがちがたく結びついている。

黄金時代という認識を最も明確に提唱したのは、デュフルク『フランス音楽』（1949）である。先述の通り、彼はフランス音楽における黄金期のうち、近代に相当する時期を「第四黄金期」ととらえている。デュフルクは他の音楽史書でも近代をフランス音楽が覇権を

⁹ たとえば Salini (1979)、Fousnaquer (1992) が挙げられる。

¹⁰ たとえば Germain-David (2004) が挙げられる。

¹¹ 現代音楽の時代区分に関しては、沼野 (2005) 第 1 章に詳しい。

¹² ドビュッシーのカノン化をめぐる問題は、Kelly (2008)、Kelly(2013)および Chimènes (2013) に詳しい。ドビュッシーの受容と音楽史記述の関連性については Trotter (2014) が論じている。

握った時期とみなしている。たとえば『起源から今日までの音楽』（1946）においては、ロマン主義の時代はドイツ音楽優位の時代と位置づけ、近現代をフランス・ロシア音楽優位の時代としている¹³。

近代を黄金時代ととらえる認識はファン・アカール Van Ackere 『フランス音楽の黄金時代』（1966）にも継承されている。本書においては、サン＝サーンス、フランク、フォーレ、デュカ、ドビュッシー、ラヴェル、ルーセル、シュミット、ミヨー、オネゲルらが黄金時代の担い手として詳述されている。そして結論の最後にシェフェールの《一人の男のための交響曲》の初演について触れ、フランス音楽の黄金時代が続くことを述べて締めくくっている。

このように近代フランス音楽を黄金時代ととらえ、フランス音楽の優位性を主張する音楽史観は、第一次世界大戦後に顕著になるが、1950年代以降、次第にみられなくなっていく。

おわりに

以上のことから、フランス音楽史および近代フランス音楽史に関しては、概ね1870年から1945年までをひとつの時代区分としてとらえることが妥当であると判断される。近代フランス音楽をめぐるのは、三つの戦争を経てフランス音楽のあり方が問い直され、新たな試みが活発に行われたことは知られているものの、音楽史記述として、この時期をどうとらえようとしてきたかについては十分に検討されてこなかった。本稿では、近代フランス音楽を一つの時代として区切ることが、フランス音楽の優位性を主張する上で重要であったことを指摘したが、その歴史的背景や、個々の音楽史書における音楽史観については、稿をあらためて論じたい。また、本稿で明らかにした傾向は、通史や近現代音楽史においても共通して見られるものなのか、そのような記述がいかなる歴史観・音楽史観や美的価値観と結びついていたのかについても検討していきたい。

本稿は JSPS 科研費（若手研究 B、課題番号 25870215）の成果の一部である。

¹³ ただし、事実上フランス音楽の優位性が強調されている。

参考文献

一次資料

フランス音楽史（通史） []内は時代区分の分類

Coquard, Arthur. 1891. *De la musique en France depuis Rameau*. Paris: Calman Lévy. [D]

Lavoix, Henri. 1891. *La musique française*. Pais: Ancienne Maison Quantin. [A]

Bruneau, Alfred. 1901. *La Musique française. Rapport sur la musique en France du XIIIe au XXe siècle. La musique à Paris en 1900 au théâtre, au concert, à l'exposition*. Paris: Eugène Fasquelle. [A]

Weill, Janine. 1935. *De Couperin à Ravel, panorama de la musique française. Conférence donnée en mai 1934 au Conservatoire national de Lisbonne et à l'Académie de musique de Coimbra*. Coimbra: Coimbra Editora. [D]

Landormy, Paul. 1943-1944. *La musique française*. (3 vol.). Paris: Gallimard. [D]

Gaudefroy-Demombynes, Jean. 1946. *Histoire de la musique française*. Paris: Payot. [B]

Dufourcq, Norbert. 1949. *La musique française*. Paris: Larousse. [E]

Reinhard, Marcel dir. Norbert Dufourcq. 1954. *Histoire de France*. Paris: Larousse. [B]

Barraud, Henry. 1956. *La France et la musique occidentale*. Paris: Gallimard. [D]

近代フランス音楽史 []内は時代区分の分類

Solenière, Eugène de. 1901. *1800-1900. Cent années de musique française, aperçu historique*. Paris: Puyno. [C]

Masson, Paul-Marie. 1913. *Rapport sur la musique française contemporaine*. Rome: tip. di Armani e Stein. [E]

Jean-Aubry, G. 1916. *La musique française d'aujourd'hui*. Paris: Perrin. [B]

Tiersot, Julien. 1918. *Un demi-siècle de musique française, entre les deux guerres 1870-1917*. Paris: F. Alcan. [B]

Rohozinski, Ladislas dir. 1925-28. *Cinquante ans de musique française, de 1874 à 1925*. (2 vol.). Paris: les Éditions musicales de la Librairie de France. [C]

Bernard, Robert. 1930. *Les tendances de la musique française moderne*. Paris: Durand. [D]

Dumesnil, René. 1946. *La musique en France entre les deux guerres: 1919-1939*. Paris: Editions du Milieu du monde. [B]

Rostand, Claude. 1952. *La Musique française contemporaine*. (Que sais-je?) Paris: Presses universitaires de France. [D]

François-Sappey, Brigitte. 2013. *La musique en France depuis 1870*. Paris: Fayard. [B]

その他

Baillar et al. 1916. *Un demi-siècle de la civilisation française, 1870-1915*. Paris: Hachette.

Servières, Georges. 1897. *La Musique française moderne*. Paris: G. Havard fils.

Rolland, Romain. 1908. *Musiciens d'aujourd'hui*. Paris: Hachette.

Woollett, Henry. 1909-1924. *Histoire de la musique depuis l'Antiquité jusqu'à nos jours*. (4 vol.)
Paris: Publication du "Monde musical"

Marnold, Jean. 1912. *Musique d'Autrefois et d'Aujourd'hui*. Paris: Dorbon.

Masson, Paul-Marie. 1913. *Rapport sur la musique française contemporaine*. Rome: tip. di Armani e Stein.

Chantavoine, Jean. 1921. *De Couperin à Debussy*. Paris: Libr. Félix Alcan.

Séré, Octave. 1921. *Musiciens français d'aujourd'hui*. Notices biographiques, suivies d'un Essai de bibliographie et accompagnées d'un autographe musical. Paris: Mercure de France.

Coeuroy, André. 1922. *La Musique française moderne. Quinze musiciens français*. Paris: libr. Delagrave.

Landormy, Paul. 1923. *Histoire de la musique*. Paris: Mellottée (1st published 1910).

Landowski, Wanda Alice L. 1941. *Histoire de la musique moderne 1900 à 1940*. Paris: Aubier.

Combarieu, Jules et René Dumesnil. 1955-60. *Histoire de la musique*. (5 vol.) Paris: A. Colin.

Pitrou, Robert. 1957. *De Gounod à Debussy*. Paris: A. Michel.

Roland-Manuel. 1960-1963. *Histoire de la musique*. (2 vol.) Paris: Gallimard.

Salini, Dominique and Jean-Yves Bosseur. 1979. *Révolutions musicales: la musique contemporaine depuis 1945*. Paris : le Sycomore.

Beltrando-Patier, Marie-Claire eds. 1982. *Histoire de la musique*. Paris: Bordas.

Massin, Brigitte and Jean Massin eds. 1983. *Histoire de la musique occidentale*. Paris: Temps actuels.

Fousnaquer, Jacques-Emmanuel, Claude Glayman et Christian Leblé eds. 1992. *Musiciens de notre temps depuis 1945*. Paris: Ed. Plume : Calmann-Lévy.

Germain-David, Pierrette. 2004. *Un demi-siècle de musique française, 1950-2000*.

[Bourg-la-Reine]: Zurfluh.

二次文献

事典項目

Cooper, Martin. 1994 「フランス I. 芸術音楽 7～10」 浅井香織、中村秀雄訳 『ニューグローヴ世界音楽大事典』（講談社、1994）第15巻 274-277。

[Pasler, Jann]. 1994 「パリ VII. 1870年以降」 浅井香織、中村秀雄訳 『ニューグローヴ世界音楽大事典』（講談社、1994）第13巻 422-424。

Lesure, François et al. 2017. “France. I. Art music.” *Grove Music Online. Oxford Music Online*. Oxford University Press, accessed January 15, 2017.

<http://www.oxfordmusiconline.com/subscriber/article/grove/music/40051>.

Pasler, Jann. 2017. “Paris VII. After 1870.” *Grove Music Online. Oxford Music Online*. Oxford University Press, accessed January 15, 2017.

<http://www.oxfordmusiconline.com/subscriber/article/grove/music/40089pg7>.

Faure, Michel. 1994. “Frankreich. VI. 1879 bis 1944” In *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, Sachteil Bd. 3. 770-776.

Laederich, Alexandra. 1994. “Paris. A. Stadt. VII. 20. Jahrhundert” In *Die Musik in Geschichte und Gegenwart*, Sachteil Bd. 7. 1369-1375.

平島正郎 1982 「フランス：芸術音楽」 『音楽大辞典』（平凡社、1981-83）第4巻 2154-2161。

図書・雑誌論文

Caron, Sylvain, François de Medicis and Michel Duchesneau. 2006. *Musique et modernité en France, 1900-1945*. [Montréal]: Les Presses de l'Université de Montréal.

Chimènes, Myriam and Alexandra Laederich. 2013. *Regards sur Debussy*. Paris: Fayard.

Duchesneau, Michel. 1997. *L'Avant-Garde musicale à Paris de 1871 à 1939*. Sprimont: Mardaga.

Gut, Serge and Danièle Pistone. 1977. *La Symphonie dans l'Europe du XIX siècle*. Paris: H. Champion.

Gut, Serge and Danièle Pistone. 1978. *La Musique de chambre en France de 1870 à 1918*. Paris: H. Champion.

Kelly, Barbara L. eds. 2008. *French Music, Culture, and National Identity, 1870-1939*. New York: University of Rochester Press.

Kelly, Barbara L. eds. 2013. *Music and Ultra-Modernism in France: A Fragile Consensus, 1913-1939*. Woodbridge: Boydell Press. (Music in Society and Culture)

Pistone, Danièle. 1979. *La Musique en France, de la Révolution à 1900*. Paris: H. Champion.

Trottier, Danick. 2014. “Présentation du dossier: Debussy au pluriel “*La revue musicale OICRM*. vol. 2, no. 1.

<http://ancien.revuemusicaeoicrm.org/presentation-du-numero-debussy-au-pluriel/>.

井上さつき 2009 『音楽を展示する：パリ万博 1855-1900』 法政大学出版局。

塚田花恵 2016 「『われわれのワーグナー』としてのベルリオーズ：ブリュノーの「フランス音楽」（1901）におけるベルリオーズ評価」『ムーサ』第 17 号 81-92。

友利修 2013 「書評 今谷和徳、井上さつき著『フランス音楽史』」『音楽学』第 58 巻 2 号 108-110。

成田麗奈 2014 「1870-1939 年に刊行されたフランスの音楽史書に関する基礎研究」『フェリス女学院大学音楽学部紀要』第 15 号 9-32。

沼野雄司 2005 『リゲティ、ベリオ、ブーレーズ：前衛の終焉と現代音楽のゆくえ』音楽之友社。

学会発表資料

友利修 2014 「フランスの音楽文化における大戦——近い記憶、遠い記憶そして『現代』」日本音楽学会東日本支部 第27回定例研究会 シンポジウム「第一次世界大戦と音楽」2014年12月31日、桐朋学園大学。